一般社団法人日本トイレ協会
JAPAN TOILET ASSOCIATION
〒105-0003
東京都港区西新橋3-15-12
GG HOUSE 5階
E-mail : info@j-toilet.com

https://j-toilet.com/ 検索

広報部提案&推薦！出ました試作ピンバッジ！スッキリ爽やかなデザイン、よく見ると便器やピクトグラムサインが隠れています。QRコードとして公式サイトへ飛べます！投稿して下さった方々へのお礼としてお送りします。
サイズ：19mmx19mm

一般社団法人 日本トイレ協会 協会ニュース24 - 4号
2025年 1月発行

トイレのと

編集後記

昨年末、アナウンサーの小倉智昭さんが膵臓がんでお亡くなりになりました。ご自身の体験をもとに「男性にも汚物入れが必要だ」と勇気をもって語られた姿は、ジャーナリストとして非常に尊いものだったと思います。ご冥福をお祈りするとともに、その活動の姿勢に感謝いたします。（山戸伸孝）

能登半島地震から１年が経過いたしました。被災された皆さまに心よりお見舞い申し上げますとともに、一日も早い復興を心から願っております。今回の地震を機に、トイレ対策の重要性が改めて認識され、各所で活発な動きが見られます。政府では、2026 年度の防災庁新設に向けた動きも加速しています。過去の教訓を活かし、来たる災害に備えることが今私たちに求められているのではないでしょうか？
（新妻普宣）

毎年、会員の皆様にリアルに会えるのが楽しみでトイレシンポジウムに参加します。念願の JTA 賞作品部門を受賞したお陰で、多くの方々と名刺交換をさせて頂きました。U 先生の「今後も諦めないで頑張って下さい」とのお言葉が心に沁みました。長崎で開催する「災害時の携帯・簡易トイレ」研修会の背中を押して頂いた気がします。（竹中晴美）

2025 年始まりました。どんな一年になるのか楽しみです。
今年も１年よろしくお願い申し上げます。（高橋佳乃）

2025 年度は日本トイレ協会創立 40 周年です。なにか記念になることができないか運営委員のみなさんで相談中です。企画が決まりましたら事務局からお知らせします。（小澤美紀）

Contents

JAPAN TOILET ASSOCIATION

1　謹賀新年　新年のご挨拶
2　第40回全国トイレシンポジウム　開催報告
3　第40回全国トイレシンポジウム　パネルデイスカッション
4 -- 6　2024年度JTAトイレ賞　審査結果
7 -- 8　会場の様子
9 -- 11　活動報告　ノーマライゼーション研究会　セミナー報告
12 - 13　活動報告　災害・仮設トイレ研究会からの報告
14 - 15　リレートーク　学校のトイレは今どうなっているか
16　新入会員のご紹介
17　私の推薦トイレ
18　事務局より　information

山本耕平
日本トイレ協会会長 /（株）ダイナックス都市環境研究所 代表取締役会長

明けましておめでとうございます。日本トイレ協会は 1985 に設立しましたので、今年で 40 周年となります。設立のいきさつや初期の活動については、本誌に連載いたしました。私は設立から事務局長として 10 年務めましたが、昨年期せずして会長に就任いたしました。半年あまりが経過して、これまで取り組んできた活動の成果と社会的影響をあらためて認識するとともに、ますます社会的役割や期待が高まっていることを実感しております。

たとえば、この間に海外からの訪問や問合せが何回もありました。特にメンテナンスや文化的な背景、教育などに関心を持たれているようです。メンテナンス研究会を中心に多年にわたって培ってきたノウハウや技術は、世界を凌駕するものがあります。

能登半島地震であらためて災害時のトイレの重要性が叫ばれていますが、その原点が 30 年前の阪神・淡路大震災のときのトイレ協会の活動にあるということで、マスコミの取材もたくさんきました。国では、自治体に対してトイレ確保計画の策定やトレーラートイレの普及などに予算をつけて、推進しようとしています。災害・仮設トイレ研究会の役割や製品開発などに期待されるところは大変大きくなっています。

また災害時だけでなく、今後のトイレを考える上で「インクルーシブ」という視点が重要です。ジェンダーの問題もその一つですが、バリアフリートイレのあり方の問題、先般お亡くなりになった小倉智昭さんの問題提起から始まった男子トイレの汚物入れ設置の問題など、様々な課題があります。こうした問題に対して、業際的、学際的に取り組むプラットホームとしての役割が日本トイレ協会には求められるのではないでしょうか。

西岡秀雄初代会長は「トイレ学」を提唱されていました。1987 年には「トイレの研究」（日本トイレ協会編）という本をつくりました。この本の副題は「快適環境を求めて総合的に科学する」としました。歴史・文化・医学・環境・衛生・建築・都市計画・設備器具など、様々な分野の専門家にトイレに関する論文を執筆してもらいました。高橋会長時代にはさらに大部の「トイレ学大事典」を編纂しました。トイレ協会は学会ではありませんが、様々な分野でトイレをテーマとした研究や著作、製品や技術開発が行われています。こうした学際的・業際的な取り組みについて、トイレに関するプラットホームとして分野横断的な発表の場、情報共有の場づくりが必要ではないかと考えています。

さて、現在のトイレ協会には、設立当初からあるいはそれ以前の「トイレットピアの会」からともに活動してきた仲間もいますが、40 歳年をとったわけですから組織の持続性という点からは次の世代につないでいくことが不可欠です。幸い「若手の会」が発足して活動の幅を広げています。若い世代で問題意識を共有し、活動していくことはもちろん重要なことですが、トイレ協会が 40 年にわたって積み重ねてきたさまざまなリソースを活用して、トイレ協会を次の時代につないでほしいと思います。もっとも価値あるリソースは、多様なメンバーすなわち「人的資源」です。積極的に、知識、経験、ネットワークを受け継いでほしいと念願しています。そのためには各委員会への参加や運営委員としての活動にも期待しております。

30 周年の時には、総会を兼ねてフォーラムを開催しましたので、40 周年も何らかのイベントを企画できたらと思います。その意味では今年は50周年に向けたスタートの年です。どうぞよろしくお願いいたします。

山本耕平
第 40 回全国トイレシンポジウム実行委員長

2024 年は元日早々に能登半島で大きな地震があり、あらためて災害時のトイレ問題がクローズアップされ、まだまだ解決すべき課題が多いことを認識いたしました。第 40 回全国トイレシンポジウムではこうした問題意識から、「能登半島地震の経験から考えるインクルーシブ防災と災害トイレ」というテーマを掲げました。

まもなく 2025 年 1 月 17 日、阪神・淡路大震災から 30 年を迎えます。当時、日本トイレ協会は、神戸市役所と協働して避難所等のトイレ清掃と実態調査を行いました。下水道が普及した大都市での地震災害とトイレが使えないという状況は誰も経験したことがなく、このときの調査が仮設トイレの適正数や携帯トイレ、マンホールトイレの開発など今日の災害トイレ対策につながりました。

その後も度々大きな災害に見舞われる中で、災害トイレは数の確保については大分改善されてきたところですが、能登半島地震では上下水道がともに大きな被害を受けたために、長期にわたってトイレの利用に大きな制約がありました。特に高齢者や障害者、子どもを含めて、福祉的な配慮が必要な人のニーズへの対応は大きな課題が残されています。

今回は災害トイレにおける「インクルーシブ防災」、すなわち災害時に誰も取り残さないトイレ対策という視点からの課題を共有することを目的としました。

能登半島地震の現状については、インフラの復旧が困難でいまだに携帯トイレを使わざるを得ない地域があること、震災からの復旧がようやく始まろうとした矢先に 9 月の豪雨災害で振り出しに戻ってしまったという過酷な災害の実情に、胸を痛めることしかできず歯がゆい思いを感じたのは私だけではなかったと思います。基調講演の浜松医科大学の尾島俊之先生からは、行政の指揮系統の調整や医療支援の専門家チーム、ボランティア団体や民間事業者などの連携が課題であることを指摘され、そのような体制をどうつくっていくのかを考えていく必要があることを痛感いたしました。

また今回は友好団体である台湾衛浴文化協会（台湾トイレ協会）から、林錦堂会長に台湾の災害トイレについて報告していただきました。災害が起きたときに被災者の安心・安全のためにはＴＫＢ（トイレ、キッチン、ベッド）が重要ですが、4 月の花蓮県での地震ではこうした対策が日本よりはるかに迅速に対策がとられたことが話題になりました。台湾も地震大国で、たびたび大きな災害が起きますが、そのたびに関係者の連携や協働の体制が見直されてきたことが、迅速な支援の背景にあるというお話がありました。

最後に、高橋未樹子さんのコーディネートでインクルーシブという視点から話し合いをいたしましたが、このような議論の場の必要性をあらためて感じました。

講師のみなさま、企画運営に尽力していただいた実行委員、事務局の皆様に深く感謝申し上げ、第 41 回にバトンをお渡ししたいと思います。

高橋未樹子 理事 / コマニー（株）　研究開発課 課長

誰ひとり取り残さないインクルーシブ防災について

誰もが苦労する避難生活において、とりわけ高齢者や障害者の避難生活は困難を極めます。シンポジウムの最後は、講演された皆様に登壇頂き「インクルーシブ防災」について意見交換を行ったので、能登や台湾での取り組みを紹介します。

珠洲市では、携帯トイレを分散備蓄していましたが道が寸断されたため各避難所に届けられず、便がてんこ盛りになっていた避難所もあったそうです。そこで、1/3 から避難所などのトイレを巡回し、清掃して周り、携帯トイレの使い方の指導をしました。さらに、高齢化率が 50% を超える珠洲市では避難所に行けずに自宅避難の人も多いため、全世帯を 1 軒 1 軒まわり、自宅トイレの清掃や、簡易・携帯トイレの使い方指導を行いました。この自宅訪問は 1 回きりではなく、認知症の方の場合には毎日訪問し、トイレの使用状況を確認されました。地震から数日たつと、慣れない避難所での生活に馴染むことができず、雨漏りしていても倒壊しかけていても自宅で生活をしたいと避難所から自宅に戻る高齢者も多く、自宅での避難生活、トイレの環境を整えることを継続して行われました。さらに、ご本人の意向を確認しながら、状況に応じて 2 次避難所へ勧めるなどの支援をされました。

輪島カブーレでは、1/2 から輪島市役所の 2 階を福祉避難所として開設されました。ここには障害者だけでなく、一般の市民の方もたくさん避難されていてトイレが便でてんこ盛りになりました。避難されている市民の皆さんがまだ放心状態で動けないなか、カブーレのスタッフや障害者が便を掻き出しトイレの清掃をしたそうです。このような対応ができたのは、普段からこの市役所のトイレ清掃を請け負っていたからです。普段から行っている清掃活動を、普段通り行うことで、普段は支援をされる側であることが多い障害者が、避難者の生活を支えていたそうです。ある地域の避難所では、発達障害の子どもが慣れない環境で奇声をあげてしまい、避難所から追い出されてしまったということもありました。そのような中、障害者と市民の皆さんがお互いに助け合いながら避難所生活を送ることができたのは、“ごちゃまぜ” をコンセプトに普段から障害者と市民の皆さんが交流し、お互いに知り合うことをしていたからではないでしょうか。

台湾では、災害時は中央政府から市町村に指令が行くそうです。各市町村では普段から支援が必要な人を把握しているので、目が見えない方、車椅子の方、高齢の方などでグループ分けを行い、医者やナースが派遣されている避難所に避難するようになっています。台北市のような大きな市では難しいところもありますが、小さな町では各市町村長と市民との関係が普段からできていて、支援が必要な人の全把握ができています。中途失明者に対しては、生活や就職などを支援する体制があり普段から状況を把握できていることが、災害時にも活きています。

能登や台湾の対応を伺い、非常時に突然ではなく、日頃からのインクルーシ防災が重要であることを改めて学びました。いつどこで起こるか分からない災害に、今回の能登半島地震の経験を活かせるように、これからも能登の現状を発信していきたいと思っています。

JTA トイレ賞審査委員会

2023 年度より「JTA トイレ賞」と名称を改め、「みんながいつでもどこでも気持ちよく使える」トイレ環境をつくり、それを持続できる社会をつくることを目標に、顕著な活動の実践や提案を行っている作品を表彰しています。
2024 年度は 4 部門 23 点のご応募がありました。

応募作品
23 作品
（作品部門：11，著作･研究部門：1，　維持･管理･運営部門：2　社会的活動部門：9）

選考方法
審　　査：審査委員および協会運営委員等による審査を基に、審査委員会での最終審査により、
　　JTA トイレ賞・奨励賞を選定
一般投票：トイレシンポジウム、トイレ産業展来場者による投票（48 名投票）により、
　　一般投票賞を選定

審査委員会
委 員 長：小松　義典（協会員、名古屋工業大学大学院 准教授 / 建築環境工学）
副委員長：中野　和典（運営委員、日本大学工学部 教授 / 環境生態工学、環境工学）
部門審査委員
A) 作品部門
小松　義典（前掲）
長澤　夏子（協会員、お茶の水女子大学基幹研究院 教授 / 建築計画・環境心理）
B) 著作・研究部門
川内　美彦（運営委員、元東洋大学ライフデザイン学部 教授 / ユニバーサルデザイン）
森田　英樹（運営委員、総合トイレ学研究家 / トイレ歴史）
C) 維持･管理･運営部門
山戸　伸孝（運営委員、㈱アメニティ代表取締役社長 / トイレメンテナンス）
山本　浩司（理事、中日本高速道路㈱東京支社 / 道路施設管理運営）
D) 社会活動部門
山本　耕平（会長、㈱ダイナックス都市環境研究所代表取締役会長 / 環境・まちづくり）
中野　和典（前掲）
委　　員：小林　純子（名誉会長、設計事務所ゴンドラ代表 / 建築）
上野　義雪（副会長、元千葉工業大学工学部 教授 / 室内計画・人間工学）
高橋未樹子（理事、コマニー㈱研究開発本部 / ユニバーサルデザイン）
細野　直恒（運営委員、NPO 法人にいまーる理事 /ICT、人間工学 ･ﾕﾆﾊﾞｰｻﾙﾃﾞｻﾞｲﾝ）
村上八千世（運営委員、常磐短期大学 准教授 / 幼児教育・環境）
幹　　事：浅井佐知子（運営委員、設計事務所ゴンドラ / 建築・ワークショップ）
アドバイザー：高橋志保彦（名誉会長、神奈川大学名誉教授 / 建築・都市デザイン）、

選考結果

▪審査結果

JTAトイレ賞		
部門	タイトル	応募者名
作品	Project Lav-US　※Lav-US：Lavatory-Urakami Station "浦上と長崎らしさがテーマ。 駅とまちをやさしくつなぐ、真っ白な公衆トイレ(オアシス)"	田邊　猛（長崎市建築部建築課 次長） 中野　智文（長崎市土木部土木企画課 課長） 竹中　綾美（「みんなにやさしいトイレ会議」実行委員会 委員長）
維持・管理・運営	高速道路休憩施設のトイレにおけるBIMモデルを活用した維持管理の高度化・効率化	嶋浦　早紀・鈴木　健・伊藤　佑治・金森　愛咲美 （中日本高速道路（株）東京支社） 泉　史朗・今井　開徳・加藤　あす香 （中日本ハイウェイ・エンジニアリング東京（株））
社会的活動	防災兼用型ソーラーカーポートのマンホールトイレ	能美防災株式会社 東京電力エナジーパートナー株式会社 日本ファシリティ・ソリューション株式会社 東テク株式会社 株式会社日建設計
	移動型バリアフリートイレトレーラー『モバイルトイレ』の開発および啓蒙活動	モバイルトイレPJTチーム トヨタ自動車株式会社

奨励賞		
部門	タイトル	応募者名
作品	クリスタルタワー8階トイレ 「これからのオフィストイレ～誰もが使いやすい快適なトイレ～」	株竹中工務店 株朝日新聞社 株アサヒファシリティズ
社会的活動	鹿児島工学院専門学校女子トイレ改修	中濱 幸志郎 （E.M.A.LAB）
	潮田による携帯・簡易トイレの教育・啓発活動	長谷川高士 （くまもと水と福祉の研究室（ラピシュット合同会社）

▪投票結果

一般投票賞		
部門	タイトル	応募者名
全部門共通	これまでの常識を覆す！業界初の特許技術で『感染予防＆臭わない仮設トイレ』誕生！ 38.6℃を記録した真夏の大規模野外イベントや真冬の能登半島被災地域でも大活躍！	インプループエナジー株式会社 廣瀬 幸雄（金沢大学名誉教授/ビタル企画）
	骨格分析×AIで異常を検知するトイレ内異常検知システム 『Kaye（エックスアイ）』	尾崎 三夫（三協エアテック株式会社）
	Project Lav-US　※Lav-US：Lavatory-Urakami Station "浦上と長崎らしさがテーマ。 駅とまちをやさしくつなぐ、真っ白な公衆トイレ(オアシス)"	田邊　猛（長崎市建築部建築課 次長） 中野　智文（長崎市土木部土木企画課 課長） 竹中　綾美（「みんなにやさしいトイレ会議」実行委員会 委員長）

総評

全体総評
審査委員会委員長　小松　義典

応募者の皆様や審査員の先生方の多大なご協力により、JTA トイレ賞への名称の変更や部門別の応募を導入した改革もようやく定着することができました。トイレに関連する様々な部門で活躍される皆様の優れた作品や活動を日本トイレ協会が表彰する意図がよりよく伝えられるようになり、受賞者の皆様が誇れる賞へと育っているものと考えています。

本年も 23 作品の多くの優れた作品の応募をいただきました。1 枚のパネルで伝えることは簡単ではありませんが、こうしたプレゼンテーションに関するレベルもますます高くなっています。

JTA トイレ賞の 4 作品や奨励賞の 3 作品はもちろんのこと、惜しくも選外となった作品にも個々に優れた点がありました。本年は特別賞はありませんでしたが、いろいろな賞をお送りする審査体制をとっています。ますますたくさんの作品の応募を期待しています。

最後に、ご応募いただいた方や審査・投票にご協力いただいた皆様に感謝を申し上げます。
来年も本年を超える盛り上がりを期待しております。
誠にありがとうございました。

会場講評
審査委員会副委員長　中野　和典

たくさんの作品を JTA トイレ賞へ応募していただき、作品のレベルも高くなってきており、限られた数の作品しか表彰ができないのは、もったいないと感じております。こうしてトイレへの関心を高めるイベントとして非常に盛り上がっていることが素晴らしいと思います。来年もぜひこの盛り上がりを期待して会場講評とさせていただきます。受賞者の皆様、おめでとうございました。また、応募者をはじめ、このイベントを支援していただいた皆様、大変お疲れ様でした。

選考結果および各作品や講評は、HP に掲載しています。
2024 年度 JTA トイレ賞 審査結果 / 一般社団法人 日本トイレ協会
https://j-toilet.com/2024/12/08/2024jta-award/

会場

基調講演　尾島俊之 氏

台湾衛浴文化協会 林錦堂 理事長

オンライン配信の様子

ディスカッション

コーディネーター　高橋未樹子 氏

外山　ゆう子 氏

三上　豊子 氏

JTA トイレ賞実行委員長　浅井佐知子 氏

閉会挨拶　上野義雪 副会長

交流会

社会的活動部門（モバイルトイレ）
受賞者

社会的活動部門（マンホールトイレ）
受賞者

維持・管理・運営部門　受賞者

作品部門　受賞者

矢口絵理奈　ノーマライゼーション研究委員会 事務局 /（有）設計事務所ゴンドラ

1. はじめに

一般社団法人　日本トイレ協会　ノーマライゼーション研究委員会（以下、「N 研」という。）では、人が自立して暮らす上で、大きなウエイトを占めるトイレを軸にしながら、障がいのある人や高齢の人のみならず、様々な人を対象に、社会活動を営む上で不可欠なトイレのあり方、みんなが安心して使えるトイレはどうあるべきかについて考える活動を展開し、1997 年よりセミナーの開催を行っておりましたが、新型コロナウイルス感染症の拡大等を踏まえ、2020 年より活動を休止させていただいておりました。しかしながら、昨今、政府による新型コロナウイルス感染症緊急事態解除が宣言されたことを受け、昨年度から活動を再開いたしました。昨年度はN研メンバーの星川安之さんによる「良かったこと調査」セミナーを行い、今年度もN研メンバーによるセミナーを開催いたしました。

2. N 研セミナー内容

今回開催したN研セミナーの内容は下記のとおりです。

2-1　タイトル：人の属性、五感や動作能力を考慮したトイレのニーズ等の調査
2-2　開催形式：対面、及びオンライン開催
2-3　日　　時：令和 6 年 9 月 28 日（土）15:00 ～ 17:00
2-4　講　　師：一般社団法人 日本トイレ協会 副会長 上野義雪さん

千葉工業大学工学部デザイン科学科の元教授で、専門は建築計画、インテリアデザイン、人間工学です。椅子やシートの機能性、筆記具の使いやすさ、バリアフリーデザインなど、日常生活における様々な製品の快適性と使いやすさを向上させる研究に取り組んでいます。

1）研究分野
・建築計画、人間工学、インテリアデザイン、製品デザイン、バリアフリーデザイン

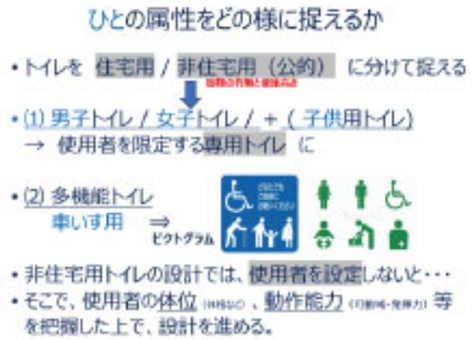
2）主な業績
・椅子・シートの機能性と評価に関する研究：博士論文のテーマでもあり、日常生活における椅子やシートの重要性に着目し、快適性、使いやすさ、身体への影響などを多角的に研究。
・バリアフリー教育実践のためのマニュアル作成に関する研究：バリアフリーデザインの理解を深め、実践につなげるための教育マニュアを作成

2-5　内　　容：トイレのノーマライゼーション（標準化・正常化）を考える場合、対象とする利用者をどの様に考えるか整理する必要がある。しかし、先行研究では、対象とするトイレユーザーの属性が障害者属性に限定されがちであったと解釈できます。このような背景を踏まえ、一般社団法人 日本トイレ協会 ノーマライゼーション研究委員会では、人の属性、五感や動作能力、トイレに求める多様なニーズ等の違いなどを考慮したうえで、
①対象とするトイレユーザーの属性（ひと系）の把握
②属性に応じたトイレニーズ（環境系、もの系、空間系）の把握
③これらを踏まえたトイレ（一般、共用、専用）とのマッチング
について、調査等を進めており、今回は、その全体像を語っていただくとともに、この件に関してお話をしていただきました。

①ひとの属性の捉え方

まず、トイレは住宅用と非住宅用（公的）に分けて捉える必要があり、履物の有無によって洋式便器に座った時に数 cm の差が出てくるそうです。

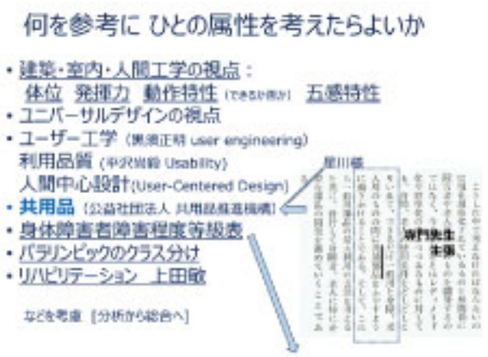
さらに非住宅用トイレには男子トイレ、女子トイレ、子供用トイレ、多機能トイレがあり、非住宅用トイレでは使用者を設定する必要があります。そのため、使用者の体位（体格など）、動作能力（可動域・発揮力）等を把握した上で、設計を進めなければならないと教えていただきました。



これまでは「一般トイレ＋多機能トイレ」という区分であったが、これからは「一般トイレ＋機能分散トイレ」という分け方に変わっていくと考えられます。トイレブースの種類が増え、選択肢が増えた様に思えるかもしれません。しかし、入る前に使用したいトイレを迷うことなく選択できるように考慮しなければならず、情報伝達のガイドが必要になります。

②ひとの属性を考えるには

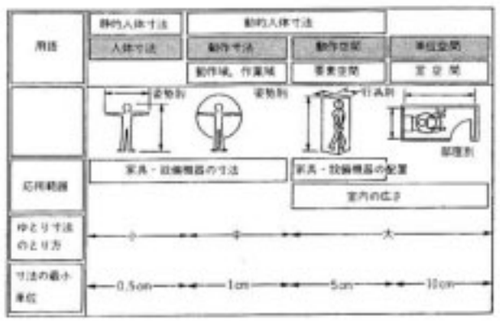
障害名・補助具名・疾病名ではなく、何ができ・何ができないか、が重要なファクターになります。そのためには、ひとの能力の把握をしなければならず、身体状況や機能・諸能力（五感、障害者障害程度等級、ADL）を知ることが必要になります。つまり、「ひと（属）」をどのように整理・分類するかが、トイレユーザーの分類につながるそうです。



つまり、ひとの属性を考えるには、建築・室内・人間工学の視点では体位・発揮力・動作特性（できるか否か・五感特性、ユニバーサルデザインの視点、ユーザー工学（黒須正明 user engineering）、利用品質（ 平沢尚毅 Usability）、人間中心設計（User-Centered Design）、共用品（公益社団法人 共用品推進機構）、身体障害者障害程度等級表、パラリンピックのクラス分け、ADL を参考にする必要があると教えていただきました。

③物づくり・物づかいの人体寸法

まず、人体寸法の資料を作ることからはじめると、人体寸法には静的寸法・動的寸法が必要となります。そして人が動く「行為」は設計のひとつの要素として考える必要があります。そして実測寸法だけでなく、人が動いた際のゆとりも考慮した寸法も加味して空間の大きさを考える必要があると教えていただきました。



また、便器には JIS の規格があるものの、便座は製品によって厚みが異なるため、実際に座って使用する際に大きく影響するため大便器の高さを高さは便器と便座の高さを合わせて考えなければならないと教えていただきました。

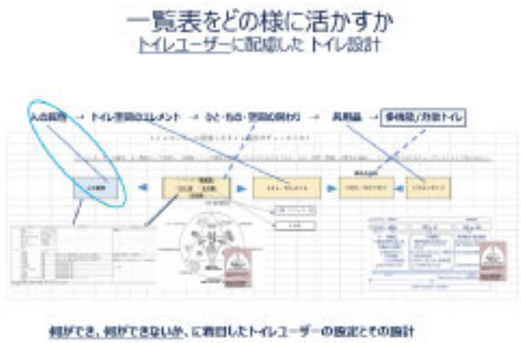
④五感での情報入手の容易性を考慮

人間の感覚受容器官（五感）は、視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚のほかに直感・勘があります。そして、五感による知覚（情報判断）の割合情報量の約８割は視覚に依存しています。そのため、五感を活用できない人・過敏である人への配慮をする必要があり、視覚情報をいかに補填するか、その対応に重きをおくことが重要だそうです。五感は日常生活や危険の回避など、多くの場面で重要な役割を果たすため、空間設計、製品設計に十分な理解が必要です。

つまり、使用者が迷いを生じない「もの・空間」づくりを目指し、操作系については、ポピュレーションステレオタイプ（多くの人に共通する傾向や癖）の考慮をし、トイレ設計には配置などに共通性確保をしなければならないと教えていただきました。

⑤トイレユーザーの対象を想定するための一覧表の作成について

一人でも多くの背景や立ち位置を確認するための一覧表は、トイレユーザーを想定するために人間工学、医学、リハビリ、スポーツ学などの立場から項目を整理し作成を行ったそうです。基本的な考え方として、設計側、供給側などの立場におられる人に参考となるトイレユーザーの一覧表となるもので、トイレユーザー、設計者、設置者、管理者側など、トイレに関わる方たちを考慮すると、トイレ空間の性能やトイレユーザーの想定の参考になる「物差し」として考えているそうです。



⑥トイレは用が足せればよいか

機能分散トイレに向けて目指すべきことは容易性の確保です。誰もが迷いなく容易にトイレにたどり着ける、トイレ内の設備機器の有無が把握でき、トイレ内の設備機器の配置が理解し、安心して 、気持ちよく、気兼ねなく、確実に操作・使用できる、使用後には使用前の状況に戻しやすい工夫があり、緊急時に適切な対応について伝えられるかが大切になります。

新任運営委員のご紹介

2024 年度より新しく５名の方が運営委員に就かれました。前号に続きでご紹介いたします。

藤山 真美子さん

運営委員
お茶の水女子大学
文理融合 AI・データサイエンス
センター　准教授

2024 年度より運営委員を仰せつかりましたお茶の水女子大学の藤山です。現在は、本学のジェンダード・イノベーション研究所で、「インクルーシブなトイレ環境の形成に関する研究」を進めています。

従来のトイレ空間においてユーザの慣れによって潜在化した課題を、性差分析を取り入れることで多様な立場のユーザが抱える本音の中から明らかにし、全てのユーザが安心して選択・利用することができるトイレ空間のあり方を研究しています。このような研究活動の中で、2023 年度第 39 回全国トイレシンポジウムのパネルディスカッションでは、「THE TOKYO TOILET から何を学んだのか」というタイトルで、司会を務めさせていただきました。

パブリックトイレに対する細やかな機能や空間の充足への期待や需要は、時代と共に拡大しますが、一方で、建築・都市空間には面積的制約や予算的制約が付き物であり、千差万別のニーズを、ひとつのかたちにまとめ、さらに維持・管理していかなければならない難しさがあります。このようなテーマに対し、自身の専門分野である都市・建築デザイン上の視点から日々更新されるトイレの課題に関わっていきたいと考えています。トイレを想うさまざまな立場の幅広い関係者が集まり、長い歴史をもつ日本トイレ協会は、これら日々変化する

トイレに関する取り組みや課題を知り、共有するための大変貴重な存在だと感じております。微力ながら、お役に立てればと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

田村 房義さん

運営委員
元 TOTO UD 研究所
（現　㈱東京商工社）

今年度、運営委員に就任しました田村房義（たむらふさよし）と申します。

私は、昨年（２０２３年）６月に日本トイレ協会に入会し、今年（２０２４年）５月に運営委員に就任、７月から「ノーマライゼーション研究会」の幹事役、８月から「法人会員の会」の代表としても選出され活動中ですが、協会に入会してまだ 2 年目の新人でもあり、協会の右も左もよく分かってない状況なので、一日でも早く協会の戦力となれるよう、頑張ります。また、個人的には協会入会の想いの実現のために頑張りますので、よろしくお願い致します。私の簡単な経歴と協会入会の想いを下記します。

私は、現役時代（TOTO に約４０年勤務し、昨年９月に定年退職）は、バリアフリー（BF）・ユニバーサルデザイン（UD）配慮の水まわりの調査研究／企画を中心に、商品企画／開発から販売／販売支援まで、様々な仕事を担当してきました。

定年退職にあたり、定年後の生活を考えていく中で、大学／大学院時代の研究室の恩師から “まだ若いんだから健康なうちは何か活動したほうがいいぞ” とのアドバイスもあり、学生時代から約４０年以上取り組んできた障がい者高齢者等を配慮した住まいづくりやまちづくり関連の知識やスキル、人脈等を活かした活動ができないか？また、現役時代にやり残したことに取り組めないか？等を熟考し、住まいづくりについては、障がい児者に配慮した One to One の住まいづくり支援を、今年（２０２４年）４月より、㈱東京商工社に再就職し、スタートしました。まちづくりについては、“インクルーシブな快適公共トイレ（特に公衆トイレ）の実現” に向けた活動を、同じ想いや考えを有する方々と一緒に取組んでいけたら、と思い、当協会に入会しました。今後は、協会に所属する法人および個人会員の有志の皆さんとワークショップなどを立上げて、活動していけたら、と考えています

災害・仮設トイレ研究会 事務局

「第 9 回防災推進国民大会ぼうさいこくたい 2024in 熊本」出展報告

主催：内閣府・防災推進協議会（協力：熊本県、熊本市）
日時：2024 年 10 月　19 日（土）10：30～18：00　20 日（日）10：30～15：30
会場：熊本城ホール・国際交流会館・花畑広場

前回比較

開催年/場所	2021年/釜石	2022年/神戸	2023年/横浜	2024年/熊本
出展数 参加団体数	189 出展 173 団体	272 出展 319 団体	388 出展 403 団体	392 出展 414 団体
来 場 者	5,800 人 •オンライン視聴 10,800 回	12,000 人 •オンライン視聴 11,000 回	16,000 人 •オンライン視聴 調査中	17,000 人 •オンライン視聴 調査中
当研究会ブース 来場者（想定）	160 名 •配布物数量より	600 名以上 •配布物数量より	700 名以上 •配布物数量より	700 名以上 •配布物数量より

※出展は現地・配信を含み、団体は共同出展も含む。

目的
- 出展団体及び防災関係者に対する当研究会の周知。
- 2023 年実施した災害トイレの備蓄調査の結果発表。
- 経済産業省と日本トイレ協会との携帯トイレ備蓄推進活動及びポスター紹介。
- 普段見る機会の少ない災害用トイレ (仮設・マンホール・簡易・携帯) の実物展示による普及。

出展内容：
当研究会オリジナルロゴパックに、カタログ（研究会活動紹介パンフレット・携帯トイレ備蓄推進チラシ・全国トイレシンポジウムチラシ）と各社提供商品サンプルを封入し、2 日間で 600 セット配布。
- トイレ協会特注ベストを着用して、当協会を PR
- 防災業界のキーマンとなりうる出展団体に対して、当研究会の紹介
- 2023 年実施した災害トイレの備蓄調査の結果発表。
- 経済産業省と日本トイレ協会との携帯トイレ備蓄推進活動案内 及び ポスターでの備蓄推進。
- 出展企業の災害用トイレ (仮設・マンホール・簡易・携帯) 実物展示・商品紹介。

今後に向けて：
- 宿泊費の高騰等、地方での防災関連イベントの参加は厳しい状況になっている。
- 季節外れのゲリラ豪雨に見舞われ、一部展示品が水没。屋外展示の為、天候状況の影響を受けた。
- 開催地の熊本は過去の被災地にもかかわらず、備蓄している方は少数であった。災害用トイレの備蓄の一層の周知が必要と思われる。
- 一般の方への当協会・研究会の活動の認知・周知がされていないと感じた。引き続き当研究会の紹介を続けていきたい。

※ぼうさいこくたい（防災推進国民大会）2025 は、新潟県にて 9 月 6 日（土）、7 日（日）に開催予定

当日の様子

坂井防災担当大臣と木村熊本県知事が当協会のブースを視察されました。

第 10 回トイレ産業展 出展報告

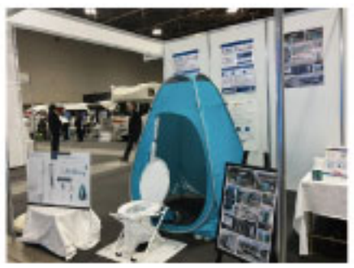
開催日程　2024 年 11 月 20 日（水）～ 22 日（金）
開 催 地　東京ビッグサイト　東展示棟　2 ホール
出展内容　当研究会資料（研究会紹介パンフレット、携帯トイレ備蓄推進チラシ）と会員企業提供のノベルティを配布

※日本トイレ協会事務局からのトイレ産業展出展報告がＰ１８に掲載されています。

第 12 回 中部ライフガード TEC2024～防災・減災・危機管理展　出展報告

開催日程　2024 年 11 月 28 日（木）・29 日（金）
開 催 地　ポートメッセなごや（名古屋市国際展示場）第 2 展示館
主　　催　名古屋国際見本市委員会
構　　成　名古屋市、愛知県、名古屋商工会議所、(公財) 名古屋産業振興公社、（公財）名古屋産業振興公社、（独）日本貿易振興機構（ジェトロ）名古屋貿易情報センター
来場者数　28 日　4,754 人、29 日　4,207 人、 合計　8,961 人

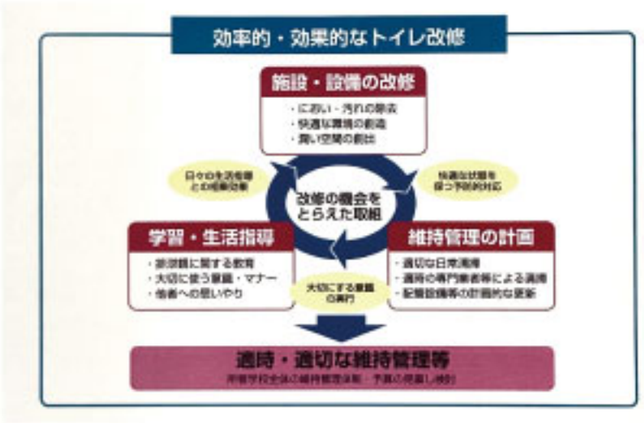
出展内容
当研究会資料（研究会紹介パンフレット、携帯トイレ備蓄推進チラシ）と会員企業提供のノベルティを配布。主に愛知県沿岸部の自治体、地元企業の防災担当者が来場し、簡易トイレの備蓄、使用方法に関する質問が中心。南海トラフ地震に備え防災に対する意識向上を感じた。災害・仮設トイレ研究会のリーフレット等のノベリティも求められることが多くすべて配布した。



リレートーク

学校のトイレは今どうなっているか

新保幸一　運営委員 / 株式会社 教育施設研究所　顧問



協会ニュースをお読みの皆様。皆様は学校のトイレにどのようなイメージをお持ちですか。どなたも学校で過ごした日々の記憶をお持ちのことと思いますが、その中には必ず学校のトイレのイメージがあるはずです。学校で過ごした年代や学校種別（小学校、中学校～のこと）によって様々だと思いますが、ざっくり言ってポジティブなイメージを持つ方は少ないのではないかと思います。

私は文部科学省の文教施設部（現文教施設企画・防災部）というところで、学校施設の設計ガイドライン（学校施設整備指針といいます）の策定や、市町村が学校施設を整備する際の国庫補助業務を担当していました。学校施設の整備は児童生徒数の変化との関連が非常に大きい事業です。日本の児童生徒数は戦後 2 回のピークを経験していて、2 度目の増加は 1970 年頃から始まり、小学生は 1981 年（1,193 万人）、中学生は 1986 年（611 万人）がピークです。この時期の児童生徒数の急増に対応するため、1970 年代から 1980 年代にかけて全国津々浦々に大量の小中学校施設が建設されました。

これらの多くが今も現役で使われており、2023 年時点で全国の公立小中学校施設 15,551 万㎡の 56.6%にあたる 8,796 万㎡が建築後 40 年以上を経過しています。そのうちの 73.5%（6,467 万㎡）がまだ改修工事を実施しておらず、耐震補強は 2016 年にほぼ完了したものの、老朽校舎の機能改善は道半ばの状況です。トイレについても、建設当時は一般家庭に先駆けて水洗式を採用するなど先進的な部分がありましたが、その後一般家庭はもとより商業施設、オフィスビル、駅や高速道路等で快適なトイレづくりが進んでいく中で、学校のトイレは他の施設より見劣りする存在になっていきました。

老朽校舎の増加に伴って「汚い、臭い、暗い」という室内環境劣化が深刻になるとともに、「慣れない和式はイヤ」等の理由も加わり、「学校でトイレに行きたくない子供問題」の解消が課題になってきます。排泄が恥ずかしい、友達にからかわれる等の理由で学校でうんちをしない子供がいることは以前から指摘されていましたが、無理に緩慢する、その結果体調を崩す、トイレに行った後には早退する等、子供たちへの影響が健康面や学校生活面に及んでいることが指摘されるようになりました。

このような状況の中、日本トイレ協会が 1997 年に開催した学校トイレフォーラムを一つの契機として、学校のトイレの改善が注目され始めます。文部科学省も 2000 年に「大規模改造事業」という老朽校舎の改修工事に関する補助事業にトイレ改修に特化した補助メニューを設けて、財政面の支援を拡充しました。さらに、2011 年には「トイレ発！明るく元気な学校づくり」というガイドブックを作成して全国の市町村に配布し、和式から洋式、湿式から乾式への転換を推奨するとともに、トイレ改修に積極的・計画的に取り組んだ教育委員会の実施例、具体的な計画づくり、改修工事のポイント等を紹介しました。

これらを契機として、学校のトイレの機能改善が少しずつ進んでいきましたが、当時はまだ耐震化の途中だったため（耐震化率は 2002 年が 44.5%、2011 年が 80.3%）、耐震補強工事を優先させる市町村が多い状況でした。耐震化が終了した市町村の多くが次の課題としてトイレ改修に取り組み始めた結果、2016 年に耐震化が概ね終了（98.1%）した以降はトイレ改修事業が増え、和式から洋式への転換が加速します。

文部科学省は 2016 年に公立小中学校施設のトイレ状況調査を行い、洋便器率（男子トイレの小便器を除く）を公表しました。この時の全便器数は約 139.1 万個で、洋式は 60.5 万個（43.3%）、和式 79.1 万個（56.7%）でした。その後、2020年と 2023年にも調査が行われ、洋便器率は 43.3%→57.0%→68.3%と増えてきました。着実に増えてきているのですが、報道では「学校のトイレはまだ 3 割以上が和式」という見出しになり、ネガティブなイメージを払拭するには至っていません。和式から洋式へ変更する場合は、便器の交換だけでなく、湿式から乾式への転換、内装や照明の更新、自動水栓の導入、個室ブース面積の拡大などと一体にした改修工事が行われるので、学校のトイレの機能改善は着実に進んでいます。

読者の皆様には、かつての学校のトイレのイメージは過去のものになりつつあることと、一方では改善が必要な老朽トイレもまだ多数あり、今後もより一層の取り組みが必要なことをご理解いただきたいと思います。

（注：児童生徒数、学校施設面積、耐震化率、洋便器率、参考画像は文部科学省の調査・資料によります。）

新入会員のご紹介

宮澤 靖明さん　個人会員

Q1　トイレ協会に入会したいと思われたきっかけ、理由はなんですか？

以前から災害時のトイレ確保/屎尿の活用に興味を持っていた。
書店で日本トイレ協会出版の書籍に出会ったことがきっかけです。

Q2　どんなお仕事をされていますか？

オフィス複合機の製造において、資源循環技術の検討に従事しています。

Q3　会員として今後関わっていきたいことなどご自由にどうぞ

災害時のトイレ確保/屎尿の活用(処理方法)で某か地域に貢献できればと考えています。

Q4　あなたにとってトイレとは？

落ち着ける、考え事に適した空間でありながら、最も無防備な場所。

和田 智代さん　個人会員

Q1　トイレ協会に入会したいと思われたきっかけ、理由はなんですか？

赤ちゃんからお年寄りまで、全ての人々が幸せに生きるために重要な「排泄」というテーマについて、様々な分野の方と交流＆活動をすることで、視野を広げ知見を深めたいと思いました。

Q2　どんなお仕事をされていますか？

子どもの排泄に関する研究＆啓発活動を行う団体「こどもと家族の排泄サポート研究所(https://www.omutsunashi.org/)」の代表をしています。人生の最初から最期までの「排泄の尊厳」を大切にできる社会を目指して活動しています。

Q3　会員として今後関わっていきたいことなどご自由にどうぞ

近年増えている「学齢期でも昼間のおむつが外れない」「おむつは外れているが排便時だけわざわざおむつを着用する」「乳児期から慢性的な便秘」などの、『子どもの排泄課題』を改善する活動に関わっていきたいです。

Q4　あなたにとってトイレとは？

「ああ、すっきり出て気持ち良い！」という、動物としての根源的な「快」を感じられる大切な場所だと思います。

私の推薦トイレ

田村房義
個人会員 / ㈱東京商工社（元 TOTO）
「法人会員の会」代表、「ノーマライゼーション研究会」幹事

私の推薦するトイレは？と聞かれても、ココは〇〇〇の理由で推薦します、という様なトイレがすぐには思いつきません。前職のトイレメーカに入社以来、約 40 年間で国内外の様々なトイレを仕事柄、数百数千ヵ所以上、見てきたといっても過言ではありません。その中で、コレは、と胸を張ってご紹介できるトイレ、というより、私自身が考えさせられたトイレをひとつのトイレとしてご紹介します。

1990 年に海外出張で訪れたスペインバルセロナ市の著名建築物である A. ガウディ設計のサグラダ・ファミリア教会を見学した際、内外観の素晴らしさに感動した反面、教会内の男子トイレが余りにも普通のデザイン・仕様で、著名建築物のサグラダ・ファミリア教会のトイレとして、もう少しふさわしい仕様・デザインのトイレがあるのではないか？という考えを抱いたのを思い出します。帰国して、その考えを社内報告したのですが、プレゼンが悪かったのか？アイデアが稚拙だったのか？実現しなかった苦い思い出です。残念ながら、その時のトイレの写真は残っておりませんが、頭の中には、今でもそのトイレが鮮明に残っています。勿論、メーカも覚えています。

その後、東京デイズニーランドの方からパーク内のトイレのお話を聞く機会があり “パーク内のトイレは、印象に残らないような仕様にしている。理由としては、パークは来場者に夢を与えるところで、トイレは夢を与える場ではなく、シンプルで、清潔で、気持ちよく利用できれば良い設備である”ということです。私が、サグラダファミリア教会で感じた考えが全面否定された思いがありました。反対に、サンリオピューローランドでアトラクションに溶け込んだ、“装飾的で奇抜なトイレ” を見学したとき、東京デイズニーランドと全く違う考え（＝トイレも夢を与える仕掛けの一部）に出会い、いろいろな考えがあるんだなあ～と思いました。

皆さんは、どう考えられますか？

もうひとつ、皆さんにご紹介したいトイレは、私が日本トイレ協会に入会して活動するキッカケとなったトイレです。そのトイレは、前職のトイレメーカを定年退職する約 1 年前に、社外の有志の某プロジェクト（目標：共生社会の実現に向けた共用品・共用サービスの開発および普及・啓発活動の推進）に参加した際、●目標達成に向けて自分で出来そうなこと●自分でやりたいこと●会社人生でやり残したこと。などを考えたときに、まだまだ多くの方から利用を敬遠される「4 K の公衆トイレを何とかキレイに利用できるようにならないか？」「キレイに利用できる方法はないか？」を考えていたときに、そのヒントとなったトイレ。「何の変哲もない某スーパーマーケットの男子トイレの小便器コーナー」は、自分にとっては目から鱗のトイレでした。このトイレを利用した際に、モップのかかった小便器（写真①）を見て、利用者が不可抗力？で汚したトイレを、汚した人が自分で掃除できるように。また、汚れているトイレを次の利用者がキレイにして使用できるように、“モップはご自由に利用ください” との標示を見たときです。このように利用者にも使用できる掃除用具が設置された公衆トイレが増えれば「公衆トイレは今以上にキレイに利用できるようになるのではないか？」と考え、コレだと直感しました。勿論、40 年近くトイレメーカに勤務していると、公衆トイレに利用者が使用できる掃除用具の設置等はタブー、壊されたり盗まれたりするので、あり得ない。公衆トイレの使用実態をご存知の方々は、誰もが口を揃えて反論すると思います。私も、今まではそう考えていました。この既成概念を打ち破れば、打ち破るためのアイデアを追求すれば、何とかなるのではないか？と思うようになったトイレです。

ただ、実現するまでには様々な高いハードルがあると思いますが、このトイレとの出会いにより、より今まで以上に『公衆トイレのキレイ化』活動に真剣に取組んでいきたい、実現するためのアイデア等を考えていきたいと考えるようになったトイレです。

写真①
某スーパーマーケットの男子トイレ

事務局より

Information

Japan Home & Building Show 2024 第 10 回トイレ産業展　出展報告

開催日程　2024 年 11 月 20 日（水）～ 22 日（金）
開 催 地　東京ビッグサイト　東展示棟 2 ホール
主　　催　一般社団法人日本能率協会
協　　賛　一般社団法人日本トイレ協会他
来場者数（JHBS 全体）　20 日　5,800 名、21 日　6,292 名、22 日　5,736 名、合計　17,828 名

第 10 回トイレ産業展へ出展しました。災害・仮設トイレ研究会と共同で活動の PR、また同会場で開催された第 40 回全国トイレシンポジウムのテーマにも合わせ災害用トイレの備蓄推進活動も行いました。2024 年 1 月の能登半島地震、また 2025 年 1 月に阪神淡路大震災から 30 年ということで、災害時のトイレに関心を持つ多くの方が当協会・研究会ブースを訪れてくださいました。研究会ブースではトイレのイラスト入りの研究会オリジナルバッグに携帯トイレのサンプルや備蓄啓発のチラシ等をいれたノベルティを配布しましたが、日本トイレ協会でもより多くの方に協会の活動に興味を持って頂く工夫をしていきたいと考えています。

次回の予定
Japan Home & Building Show 2025
会期：2025 年 11 月 19 日（水）～ 21 日（金）
会場：東京ビッグサイト

連続セミナー「うんと知りたいトイレの話」

今後の予定

第 43 回　2 月 20 日（木）日本トイレ歴史旅
第 44 回　3 月 27 日（木）子どもとトイレ研究会
第 45 回　4 月 24 日（木）身体障害者の能登半島地震
第 46 回　5 月 15 日（木）JAXA が考える飛行機のバリアフリー化の課題と解決策の提案